

## 消費者文化と脱近代化の役割と特性

徐仁煥 Seo Inhwan (韓国障害人財団事務総長)

### 1. 序論

この原稿はポストモダニズムつまり脱近代化についての話だ。現在の問題解決は、近代構造の解体と再構造化を通じて変化することだ。一つの理論やモデルではなく談論を通じた多様性を受け入れたことで未来現象について備えることができる。

この原稿は近代化が新たな仕組みをどのようにして備えるべきかを想像して見て、多様な論議を求めるための議題を提供するためのものだ。

### 2. 人類の歴史の経験

人間の歴史はより安全で楽な生活を営むことができるかとそれをいかに長く維持できるかどうかに関心を持って成功と失敗を繰り返してきた。長い歴史の中で、人類は一つの大きな教訓を得ることになった。それは相手を認めず、一方的な幸福は存在できないということだ。お互いに連合して力を育てて、構造的に役割を定めて相続をしても、多くの物質を所有して消費しても、人間の幸福は長く行くことができず保障を受けられない。

そのため人間はお互いを認めて、妥協する幸せと安全を考えるようになり、近代化の労働中心から抵抗して人間性を獲得したのが人権だ。そしてこの人権は自由と平等の保障に達成することができることを分かるようになった。

### 3. 近代化

封建主義の前近代化を経て、近代化を成し遂げたのは、資本と技術、労働の価値観で人間の

定められた身分を否定しながら始まっており、人間の機械化から脱することができたのは労働も資本に劣らない重要な役割があったからこそ、社会的権力の配分権が与えられるしかなかったためだ。

近代社会において啓蒙主義と技術の発展は資本を所有することを地位の基準と考え、白黒イデオロギーによって価値判断を追求して生きてきた。

障害者は封建社会で温情主義による家族中心の中に埋もれて生きてきたが、労働者中心で疎外集団になっており、これを補うため、福祉の国家的責任を掲げた。

#### 4. 消費者文化

人は誰でも財貨と用役を生産して消費する。人間は息をして生きるためには、その息と同様に連続的な財貨と用役の行為が行われる。商品とサービスの売買と消費が近代社会の特徴と  
例えば、障害人消費もやはり地位的に分化させ、市場も同様に分裂した形態を造成する。

技術は障害を解消、または軽減することに使用できるが、不便を解消するという技術の本来の役割よりは消費能力を中心に技術の恩恵が与えられ、障害は、さらに多くの違いを造成するようになり、社会環境はさらに深刻な障害を構造化した

ところが、人権の意識の改善と購買権の福祉的保有によって、障害人らも、消費者としての権力配分や決定権を求めるようになった。

障害者も労働に参加するように誘導する各種方策を講じながら、それが目標となって、生産をする機会を得ようとすることを介して価値を獲得しようとしている。次には、当事者主義によって自己決定権と選択権を主張しながら地位を向上させて、それによって自尊心と幸福を追求するようになる。

消費者としての要求は、社会参加の平等権と政治参加の勢力化を通じた組織化を介して強化されるが、接近性の確保、健康と医療利用での保障、文化享有権、社会の一つの集団としての固有文化の確保、意思疎通と情報習得の保障と技術開発、補助技術と社会サービスの市場での主体的役割を追求することになる。私有財産の程度が社会的地位を決定したことから消費者文化の拡散で多様性を認められて購買権を持つことができるように国家と社会が責任を持つようにする役割を果たすことにした。障害の正常化ではなく、障害の固有性を要求したものである。

## 5. 世界化と福祉国家

福祉国家の危機は、世界化によって新たな局面を迎えている。世界化は国民経済が開放的になって超国家的経済の影響を大きく受ける代わりに国家統制の影響は少なくなるという過程であり、国内経済主体らが国際的過程と取引によって国際体系に含まれて再編される。

市場は、自国の市場ではなく世界の市場を眺めて計画することになるが、福祉は依然として世界化されていない。国連障害者権利協約のように世界化を人権問題が取り上げながら、影響を与えるが、各国に促す程度の水準に福祉は国境を越えて開放されていない。

福祉関連法と制度が、国家間の影響を与え資本の価値は上がり、労働の価値は勢力が弱体化され、障害の問題のように国家に安全装置を要求することになる。つまり福祉は、疎外者だけの問題ではなく、銀行にお金を預けて引き出すのと同じ平凡な生活で認識するようになったのだ

障害関連福祉制度の多様化と総量の増加は、福祉国家への行く途中でより急務な労働弱者の福祉が優先され、障害者に対する福祉の力量はむしろ減少しながら徐行したり、停止するようになる。

このような過程の中でも、福祉の市場は拡大して技術は少ない市場規模に発展していなかった市場が世界化に市場性を備えるようになって、自由貿易で福祉のための政策は、競争から除外させることで、保護貿易の手段として活用することもある。

世界化で過去維持していた保険と年金などの持続的増加と高齢化を通じ、国家経済の危機を招いて、資本枯渇という危機に国家間の相互危機を協力が財政の柔軟性が弱い国は最終的に戻っ貧困した過去に回帰することもあり、社会的混乱を招くこともある。

そして普遍的福祉を正しく具現したこともない状況で、財政の無駄を防ぐために選別主義による福祉に戻っ立つ作る。社会保障システムが正常に整っていなかった後発の近代化の国は免疫力が非常に弱い現象で疲弊を患うことだ。そうし、社会保障体系が疎かにすれば、これも免疫力が弱く、深刻な病理現象を経験しなければならない

## 6. 脱近代化

私たちが理性で真理を感じた価値観は主に合うか違うかなければ調整された妥協案であれ、その中の一つだった。しかし、服は人によって異なり、天気とその日の日程などによって異

なる。

つまり近代化、資本主義の理念や価値観は一つの強要された既成製品として大量生産に向けて規格化したことをまた破壊しなければならない。そして人工知能と情報化、4次産業の革命によって人間の労働の価値は力を持たなくなった。

新たなサイバー世界はもう新しく作る世界なので、障害がない世の中を作ることができるという期待はもう失敗した。情報が資産として評価される社会で障害者は疎外者になって、情報の流通でも不利さを経験し、サイバーで自由と平等は一部実現され、財テクや移動の重要性の減少などに障害者の役割が変わったりもするが、全般的にはむしろ障害を量産する結果をもたらした。

脱近代化は、客観的ではなく偶発的だ。理性も作られ、選択されている。そして歴史は、過去の記録物でもなくて未来を予測することもできない。規則の真剣さではなく、今の幸福追求が必要であり、多元的で二重的な理性は社会現象の理解ではなく経験だけを要求することになる。

#### 1) 障害に対する認識変化

産業における付加価値を創出する労働が人間の地位をこれ以上決めることができない。もちろん、4次産業革命が起き、人間のほとんどの労働を機械に任せるしてもロボットに向けた生産技術と統制技術は人間の労働によって維持されるのだ。

人間はより以上の労働の価値と判断することはできない。新たな社会的役割を見だし、その役割を分配しなければならない。その分配は労働の力が基準がないため、障害に対する新しい認識と社会的価値の認定を受ける機会が与えられるはずだ。

サービスでもかなりの部分機械に任せられるからといっても人間同士の交流や消費自体がひとつのサービスで、成長するので、福祉サービスの質とそれに従事する人間の比重はさらに大きくなるだろう。ここでも重度または重複障害者は技術の発達に必要な欲求を満たすサービスは拡大されるつもりですが、成人後見制とサービスの拡大がむしろ主体がなく対象としての市場化に位置付けされる可能性もある。

人間たちは、芸術、旅行や文化をより分化させながら、多様な職種を通じて最後まで社会的な役割で労働の市場を維持するため全力を使うのだが、脱近代化は、新たな不平等を深化さ

せるよりも能力の平均化に人間性検索を模索するものと期待される。

## 2) 障害概念の変化

障害概念は固定的な概念ではなく、持続的に変化している発展していくという概念だ。したがって、障害という基準も変わり、障害の類型も変わるだろう。小児麻痺と一緒に絶滅して消える障害の類型もできて、これ以上運動や移動性が問題にならないように技術が発展すれば、肢体障害人のうち、一部は障害で認められていないかもしれない。

しかし、精神的障害の場合より複雑な社会変化に適応はさらに難しくなって社会不適応が新たに登場する類型を含めて障害の類型が多様に認められて障害人口も増えるものとみられる。

希少名や奇形の多様化と、アルコールと自殺、持続的事業の失敗、持続的詐欺にあう人、エイズなどのように世界各国が次第に障害の基準が標準化されたことで増える恐れがあり、情緒障害や学習障害のように多様な障害が増えて精神障害が治療や問題の予防がなく、個別化されたサービスに生まれ変わることになるだろう。

身体的、精神的損傷程度ではなく、社会的制約を基準として包括的な概念で障害が発展することもあり、高齢化によって各種の制約がある人と同じ範疇で弱者として統合された用語に合わせてなることもあるのだ。

## 3) 脱近代文化と障害者

脱近代化が加速化すれば、ホンバブ(1人の食事)、ホンスル(1人酒)のような個人文化が発展し、市場の製品も小さな包装の製品が流行するようになり、団体や家族連れがなく、個人に向けたサービスが発展するだろう。

個人の好みや個性が強調され、障害も一つの個性として認定され、接近性や使用の可能性が保障されて、そのような多様な商品が供給され、障害者に生活の質を高めてくれるだろうと期待される。

個人に向けたサービスが可能できるように発展していると、多様性が認められざるをえないので、障害者の利便性は拡大されないかという。

IoT(事物インターネット)、ドローン、ロボットなどの発展は非障害者にはむしろ人間性を後

退させるかもしれないが、障害者には便利さをもたらすことで、先に最も不便を感じる障害者のための技術開発で出発して、この技術が源泉技術になって、すべての人たちのための技術で成長するだろう。

疎通と調整の機能がさらに大きな比重を占めるが、グローバル化と政治政権の問題が経済的構造よりは人間性回復にもっと比重が載るながら環境と生態の重要性が強調されて、むしろ政治は無関心の対象になって、政府組織の労働部は、福祉部に統合されて労働や産業よりは健康と福祉が強調されるものと推測される。

#### 4) 福祉サービスの変化

障害の問題は、専門家による調整や介入よりは個別化された個性的に理解されて施設は消え、自己決定権や選択権が強調されながら、経済力を国家が保障してサービスが統合的に管理され、直接支払制へと発展していくものと予想される。

これ以上家族の扶養義務が力を持たず障害もタイプよりは、サービスの必要性による別途の管理体系を構築していき考慮される。

そして福祉も一つの消費者としての障害者の協同組合化でサービスの創出を障害者によって開発されて決定され、サービス提供者の設計圏よりも自主主義による合意の構造で発展し、専門家の諮問の機能が増えるだろう。

#### 5) 障害文化の変化

正常化ではなく、障害を一つの固有文化を持った層として認識しながら障害は、パスポートと一緒に同一文化の構成員としての資格のように取り上げられることと 考えられる。

国際結婚を通じた多文化と障害人文化のように文化の多様性といった一つの社会運動としてじゃなくて、障害文化が自然に文化の要素として 定着して永住権を獲得することだ。

人間は誰でも完全かつ完璧な人がいないように障害はひとつの集団の文化を構成する社会階層として専門家や国家の意図された調整や支援よりは自治区としての位置を占めていないかと思う

ただ、健康の問題で持続的な管理が必要な人と精神的障害を持った集団では違う様相を 見せることだが、医学の発展は健康な生活を拡大させているが、医学が発展すればするほど征服

されずに私ほどむしろさらに遠ざかる要素で、永遠の課題として残るだろう。

精神的障の場合、多様なサービスの開発で福祉死角地帯は減るだろうが、そして社会的役割を一部付与して参加が拡大されるだろうが、退行防止と自立に向けた生涯サービスが興味と自尊心を高めることプログラムと共に未来も維持されるのではないかと思う。

医学が原因を究明して、治療法を開発することにより、サービスの対象が多く、むしろ医学の領域に残っていないかと思う。